

「能楽」と「京劇」 アジア伝統芸能・新境地への挑戦



令和2年度
(第75回)
文化庁芸術祭
参加公演



芸術文化振興基金助成事業



公益財団法人大阪コミュニティ財団
The Osaka Community Foundation
片山千歳古典芸能振興基金助成事業

霸王別姫

～能楽と京劇 日中ユネスコ無形文化遺産の融合～

2020年10月18日(日)

鍔仙会能楽研修所 本舞台

ご挨拶

本日のご来場、誠にありがとうございます。コロナウイルスの状況が続く中で、今回のコラボレーションを実施することができ、嬉しさと感謝の気持ちでいっぱいです。我々舞台を創造する側の人間だけではどうにもなりませんでしたが、お客様、助成制度、ご寄付、スタッフなどなど様々な形での協力があって、この日を迎えることができました。このことは一生忘れることができないでしょう。本当に御礼申し上げます。

舞台装置がシンプルで、俳優のパントマイムで様式的に情感を表現するという点において京劇と能は良く似ています。が、アクロバット・立ち回り・唱など様々な要素を使って派手に演じる京劇とは対照的に、面をかぶって演じる能は動きを最小限に、声や語りの迫力を発揮することで素晴らしい存在感を顕示します。今回は能舞台を使い、この能の良さに寄り添いながらコラボレーションしていくことを念頭に稽古を進めてきました。

私は能舞台で演じるのは初めてではありませんが、これまでは能舞台で「京劇」を演じてきました。今回、「能楽師」とお互いに理解しながら「能の様式を取り入れた」演目をするというのは大変に新鮮でもあり、またプレッシャーのかかる創造でもありました。西村さんの方はこのコラボレーションに長らくお付き合いいただき、京劇への理解も深くなってきましたが、私の方は能の知識、習慣、様式などわからないことだらけの状態からのスタートです。西村さんの丁寧な説明・指導があって、大変に助かりました。

上演する題材は、これまでに引き続き「霸王別姫」となります。正直なところまったく違う演目のことも考えましたが「能と京劇のコラボレーション」からこういったものが出来上がっていくのか探求していくには、ひとつのことを集中して掘り下げるのが良いと思いました。俳優・観客お互いにとって未知のものを新たに始めるより、俳優の身体になじみ、観客の皆も知っていることから始めて、さらに新しい発見をする方がスマートです。

元になっている演目を知っているお客様は、最初は違和感を感じるかもしれませんが、両国の伝統芸能がぶつかることで生じる新しい感覚を楽しんでいただければと思います。私自身も稽古しながら毎回感じ方が変わり、新鮮な気持ちが止まりません。能舞台に照明の素晴らしい演出が入ること、さらに良い作品となることを期待しています。

最後に。私は在日京劇団の主宰として20年以上活動してきました。日本で京劇活動を続けていくことは大変に難しく、かつては幾つもの上演団体・招致団体が存在していたのに、今や京劇を日本で演じるのは我々だけになってしまいました。加えてこのコロナウイルスによって活動はいよいよ窮地に立たされています。他の業務に切り替えて成功した人たちも多く知っており、それを羨ましく思いながら、それでも私は京劇のことから逃れることができません。止まりたくてもやめられないのです。これは脈々と受け継がれる血筋の性(さが)としか言いようがありません。

反面、この京劇普及活動が日本の文化振興や日中友好の架け橋に繋がることも確信しております。何とか今後も活動が継続できるよう頑張ります。皆様にもぜひ末永く応援とご支援をいただければ幸いです。

では、本日のコラボレーション、最後までじっくりとお楽しみくださいませ。



新潮劇院・主宰 張春祥

1960年北京生まれ。祖父の代から京劇を家業とする京劇一家に生まれ、自身も北京京劇院に13年間所属。武生（ウーション・立ち回る二枚目役）を専門とし、数多くの公演で主演を務めた。

1989年来日。佐藤信「魔笛」、中島みゆき「夜会」、蛭川幸雄演出「さらばわが愛〜霸王別姫」などをはじめとして、舞台、ミュージカル、TV、映画、振り付け、立ち回り指導、ワークショップなどで活躍。

1996年、日本での京劇普及のために在日京劇団「新潮劇院」を設立。日中文化交流の懸け橋を担う。一般財団法人日本京劇振興協会 代表理事。

『二人虞姫』から『二人項羽』へ

京劇の皆さんと『霸王別姫』を御一緒するのは今回で三度目になるかと思います。過去二回は劇場ホールのステージという空間で、それぞれ工夫・変更があったものの、能の虞姫が京劇の『霸王別姫』の中に登場するという構成で、特に前回は冥界をさ迷う項羽と虞姫の霊を能の虞姫がいざない出だし物語が展開し、最後また二人を伴って冥界へ立ち戻っていくというものだったと思います。

今回は京劇側から、能楽堂という舞台空間と能の色合いをもう少し出してという要望を受けて、能『項羽』の構成の中に京劇『霸王別姫』を入れ込むことにしました。簡単に言うと、能で言う前場と後場の間にある間(アイ)語りの『霸王別姫』を展開させる訳です。その結果として今までの『二人虞姫』から今回は『二人項羽』ということになります。そして能では前場のシテ(主役)が渡し守の老人でワキ(相手役)が草刈男なのを入れ替えて、シテを草刈男にし京劇俳優に、ワキを渡し守の男にし能楽師が担うことにしました。よって京劇の俳優には日本語で演じて頂くことになり御苦労をおかけしました。後半の能の項羽は当然能楽師が、前半の渡し守から変わって演じます。

冥界という抽象的な空間から始まる前回と違って、今回は烏江のほとりの渡し場という現実的で具体的な場所から物語が始まる訳で、観客の皆様には芝居に入り込み易くなっていると思います。どうぞ新たな『霸王別姫』をお楽しみ下さい。



能楽師 西村 高夫

観世流シテ方。1976年、鉄仙会に入門。
八世観世鏡之丞、観世寿夫、山本順之に師事。
1978年『土蜘蛛』のトモで初舞台。
1982年独立。現在鉄仙会の中堅筆頭格として活躍。
世阿弥座などの海外公演にも多数参加。
1991年 清水寛二と「響の会」を結成。

ごあいさつ

今回で京劇と能楽による「霸王別姫」の再演は三回目となります。以前と同じ演目ではありますが、今回は能舞台を使って能楽と一緒に演じるというスタイルで、私にとっても初めての経験です。この趣のある舞台で京劇をどのように表現しようか？ 能の霸王様と同じ舞台上で演じるときの表現の融合はどのように？ 能の音楽を使つての動き方は…いろいろな場面全てが新しい試みの連続です。とても挑戦性に富み、意義を感じています。

コロナウイルス感染拡大防止というたいへん厳しい情勢の中、ご来場していただいたお客様に、楽しくご覧いただけたらとても幸いです。

謝々！



張桂琴

中国戲曲学院大学演劇学科卒業、同大学院を修了。
山西省京劇団で京劇俳優として活躍する一方、
14年間にわたり母校演劇科の教員を務め、
日本や韓国でも京劇の特別講師を務める。
専門は「刀馬旦(ドウマダン)」という立ち回りと
唱の両方をこなす文武を兼ね備えた難役。

上演前ワークショップ 明治大学教授 加藤徹

1963年、東京生まれ。

主著に『京劇』『梅蘭芳世界を虜にした男』

『絵でよむ漢文』など

ホームページ「京劇城」

<https://www.isc.meiji.ac.jp/~katotoru/KGJ.html>



[助成] 独立行政法人日本芸術文化振興会
公益財団法人大阪コミュニティ財団
(片山千歳古典芸能振興基金)

[後援] 中国大使館 文化部

※令和2年度(第75回)文化庁芸術祭参加公演

※コンテンツグローバル需要創出促進事業費補助金
(J-LODlive補助金)により無料動画配信予定

囃子(録音) : <大鼓> 佃良太郎 <太鼓> 澤田晃良
<小鼓> 鳥山直也 <笛> 成田寛人

謡(録音) : 西村高夫 / 清水寛二 / 安藤貴康

後見・働き : 清水寛二 / 安藤貴康

大島陸 / 小林孝徳

照明 : 山口洸(株)シアタークリエイション

能楽監修・指導 : 西村高夫

協力 : 鉄仙会 / 石山雄太

記録 : 大久保梨香

撮影 : 舞台映像COLORS

演出 : 張春祥

企画・制作 : 梅木俊治

表紙写真 : 井田裕明(項羽・虞姫) / 前島写真店(能項羽)

覇王別姫～能楽と京劇 日中ユネスコ無形文化遺産の融合～

■京劇パートは京劇演目『霸王別姫』を元にアレンジ

■能楽パートは能演目『項羽』を元にアレンジ。本来はシテの渡し守を、今回の能仕立てではワキに、そしてワキの草刈り男をシテにと置き換えている 参考文献) 能楽観世流謡本[項羽]

[後見が舞台上には舟を用意する。ワキ(船頭)登場]

ワキ 秋ごとに。野分を舟の追風に。萩の穂かくる。露の玉。(秋ごとに吹く野分を追い風に、帆をかけて船を走らせて行こう) ※「萩の穂」を「船の帆」に例えている

ワキ これは烏江のほとりの渡し守にて候。

今日も人を待ち舟を渡そうずるにて候。

(私は烏江のほとりの渡し守です。今日も人を待って、舟で渡そうと思います)

[シテ(草刈の男)登場]

シテ 蒼苔道滑らかにして僧寺に帰り。紅葉聲乾いて牡鹿鳴くなる夕まぐれ。心も澄める面白さよ。

(青々と苔の生えた滑らかな道を通って、僧が寺に帰っていく。紅葉がサラサラと鳴り、牡鹿が鳴く夕暮れ時。心が澄むような面白さだ) シテ うのうその舟に乗ろうずるにて候。

(おい、その舟に乗せてください)

ワキ あれなるは、このあたりにては見慣れ申さぬ異形の者にて候。さりながら、まずは舟に乗りようずるにて候。

おう。召され候へ。さて船賃は候。

(あそこにいるのは、このあたりでは見かけない変わった格好の者だな。だが、まずは舟に乗せるとしよう。どうぞ乗ってください。さて、船賃は?)

シテ 我等如き者の舟賃まいらせたる事なく候。

(我々のような者は船賃を払ったことなどありません)

ワキ 船賃なくはこの舟には叶い候まじ。さりながら御手に持ちし花を賜り候わば。舟に乗せ申し候べし。

(船賃がなければこの舟には乗せることができません。

ですが、(船賃の代わりに)その手に持っている花をいただけるのなら舟に乗せてあげましょう)

シテ 心得申し候。

(わかりました)

ワキ 疾く乗りたまへと棹し寄する。

(「さあ乗ってください」と棹を挿して舟を寄せる)

地謡 露刈りこめて秋草の。露刈りこめて秋草の。

葉毎に影やどる。月をや舟に乗せつらん。

天の河。たな渡りして七夕の。たな渡りして七夕の。

年に一夜は心せよ。秋風吹けば波の音。湊に近き海士小船。

水音なしに行く船の水脚棹をささうよや。水脚棹をささうよ。

(船に乗った草刈の男が持つ秋草は露がついて月影が映っている。

天の川では年に1夜、七夕の日は(波風が立たないよう)注意して。

秋風が吹けば波の音(がするくらい波が出るが)。

港に近い海士の小船(だから波も高くない)。水音もなく進む船から、挿し慣れた竿を挿そう)

ワキ 舟が着いて候。御上り候え。

(舟が着きました。どうぞ降りてください)

シテ 御舟恐れ候

(乗せていただきありがとうございます)

ワキ さてその花を賜り候え

(では、その花をください)

シテ さらばこの花を召され候へ

(じゃあ、この花をどうぞ)

ワキ 不思議な。これほど多き草花の中に。

何とてその花をば選って持ちて候ぞ。

(これほどたくさんの草花をお持ちなのに。なぜ、その花だけ別に取り持っているのですか)

シテ さん候。これは美人草と申して故ある花にて候。

(実は、これは美人草といって、いわれのある花なのです)

ワキ あら面白や美人草とは。何と申したる謂われにて候ぞ。

(何と面白い!美人草とは。どういう謂れがあるのですか?)

シテ これは項羽の後虞氏と申せし人のゆかりの草なればとて。

さて美人草とは申し候

(これは項羽の後・虞氏(姫)という人にゆかりのある草なので、美人草といいます)

ワキ 項羽高祖の戦いの様を。某も聞き知りて候が。汝も知りて候か。

(項羽と高祖(劉邦)の戦いについては私も聞いたことがあります。

貴方も知っていますか?)

シテ 左様に候わば。まずは語って聞かせ候へ

(そうですか。それでは語って聞かせてください)

ワキ 心得申し候。さても項羽高祖の戦い。七十余度に及ぶといへども。

始めは項羽打ち勝ち給ひ。一度も高祖の利無かりしに。

ある時項羽の兵心変りし。却って項羽をせばめつつ。

四面に関の聲を上ぐれば。虞氏は思いに堪へかねて。

いかがはせんと伏し給う。

また望雲驢と云う馬は。一日に千里を駆くる名馬なれども。

主の運命尽きぬれば。膝を折って一足も行かず。

その時項羽はちっとも騒がず。馬よりしづしづと下り立って。

いかに呂馬童。わが首取って高祖に捧げ。

名を揚げよやと呼ばわれども

(わかりました。さて、項羽と高祖の戦いは七十数回にも及んだといえます。

始め項羽は勝ち続け一度も高祖に勝機はありませんでしたが、ある時、項羽の兵たちが心変わりして項羽を取り囲み、四面から関の声を上げたのです。

虞氏(姫)は悲しみに堪えられず、どうしようかと泣き伏したそうです。

また、望雲驢(烏驢)という馬は一日に千里を駆ける名馬でしたが、主人の命運が尽きると膝を折って一歩も動かなくなりました。

それでも項羽は少しも動揺せず、馬から静かに降り立つと(旧知の)呂馬童に向かって「我が首を取って高祖に捧げ、名を上げよ」と呼びかけました。ところが、)

地謡 呂馬童は。恐れて近づく不覚なる者の心かな。これ見よ後の世に。

語り伝へよといひあへず。剣を抜いてあへなくも。われとわが首をかき落し呂馬童に与えそのまま。この原の露と消えにけり。

(呂馬童は恐れて近づく。「何という臆病な心の者だろうか。

これを見よ!後世に語り伝えよ!」と言い終らぬうちに、剣を抜いて、はかなくも自身の首をかき落とし、呂馬童に与え、そのままこの原(烏江)の露と消えてしまいました。)

ワキ あら不思議や。この物語を聞いてさめざめと泣くは何事にて候ぞ

(なんとも不思議な。この物語を聞いてそんなにも泣くとはどういうことですか?)

シテ さん候。昔の有様。今の様に思い出されて候。

この上は何をかつつみ候べき。項羽虞氏夫婦の様をば。

我ながら語って聞かせ候べし。

(そうですね。昔の出来事が今のことに思い出されたのです。

こうなつては何を包み隠すことがありましようか。

項羽と虞氏(姫)の夫婦としての様子を、私が語って聞かせてあげましょう)

[ワキ(船頭)退場]

シテ 力拔山兮気盖世、時不利兮驢不逝、驢不逝兮可奈何……

(力は山を抜き 気は世を蓋う。されど時の利あらず 烏驢も進まぬ)

烏驢が進まぬはいかにせん……)

妃子你你你不可寻此短见哪! 不可寻此短见哪!

(虞姫よ、早まってはならぬ!)

[舞台上転換して、椅子とテーブル。シテ退場し、虞姫登場]

虞姫 (西皮搖板)

自从我随大王东征西战(大王様に付き従い 東へ西へ戦の旅路)

受风霜与劳碌年复年年。(風雪に耐え苦勞をなめ 一年また一年)

恨只恨无道秦把生灵涂炭、(うらむべきは 非道な秦(しん))

只害得众百姓困苦颠连。(民の苦しきは 果てしない)

兵士 大王回宮!(大王様のお戻り!)

[京劇項羽 橋掛かりから登場]

項羽 (西皮散板)

枪挑了汉营中数员上将、(我が槍は漢の将兵を倒せども)

纵英勇怎提防十面埋藏。(尽きぬ伏兵に不意打たる)

传令休出兵各归营帐、(出兵を控えるよう 各将に命ずる)

兵士 大王回宮!(大王様のお戻り!)

[京劇項羽 馬から降りる。虞姫は迎えに行く]

虞姫 大王(大王さま)

項羽 (唱)这一阵连累你多受惊慌。

(こたびの戦 そなたにまで恐ろしい思いをさせてしまった)

虞姫 啊、大王今日出战胜负如何?(大王様。こたびの戦、いかがでしたか?)

項羽 枪挑汉营数员上将、怎奈敌众我寡难以取胜、

此乃是天亡我楚、唉!非战之罪也。

(我が槍は多くの敵を打ち払えども、多勢に無勢で成す術なし。

これは楚を滅ぼそうという天意であろう。戦に負けるのではない。)

虞姫 兵家胜负乃是常情何足挂意。备得有酒与大王对饮几杯、以解烦闷?

(勝負は時の運。お気にないますな。お酒はいかがですか?)

項羽 如此酒来!(酒をもて!)

虞姫 看酒!(では酒を)

项羽（西皮原板）
今日里败阵归心神不定(今日も負け戦で心は晴れぬ)
虞姬 劝大王休愁闷且放宽心(お心を広くお持ちくださいませ)
项羽 怎奈他十面敌难以取胜(敵に囲まれいかんともできぬ)
虞姬 且忍耐守阵地等候救兵(今は耐え忍び助けを待ちましょう)
项羽 无奈何饮琼浆消愁解闷(酒を飲むことでしかうさを晴らせぬとは)
虞姬 大王呀！(大王さま！)
自古道兵胜负乃是常情。(いくさに勝ち負けはつきものです)
[項羽はあくびをする]
项羽 嗯！(むう！)
虞姬 大王身体乏了，帐内歇息片刻如何？(お疲れのご様子。休まれては?)
项羽 妃子你要警醒了。(うむ、警戒を怠るでないぞ)
虞姬 妾妃遵命。(はい)
[項羽は切戸口から退場]
虞姬 看大王醉卧帐中，我不免去到帐外闲步一回！
(大王さまは奥でお休みになられた。私は外をもう一度見回るとしましょう)
[虞姬は外を歩き出す]
虞姬（南梆子）
看大王在帐中和衣睡稳，(大王様がお休みになられたのを確認)
我这里出帐外且散愁情。(私は外に出て少し気晴らしを)
轻移步走向前荒郊站定，(軽やかな歩みの前には荒野が広がり)
猛抬头见碧落月色清明。(頭を上げれば大空に月が明るく輝く)
虞姬 看，云敛晴空，冰轮乍涌，好一派清秋光景。
(晴れた空に 月光が冴える まさに秋の名風景)
[外から声が聞こえる]
众楚兵 苦しい……。
虞姬 月色虽好，只是四野俱是悲愁之声，令人可惨！
只因秦王无道，兵戈四起，涂炭生灵；使那些无罪黎民，
远别爹娘，抛妻弃子，怎的教人不恨！正是：
(念) 千古英雄争何事，赢得沙场战骨寒。
(月は美しくとも四方からは嘆きの声。なんと悲しい！
すべては秦の非道により兵たちは命をかけた。
ただの民衆が父母を 妻子を置いて、恨まずにいられようか。
まさに『千古英雄の戦いあれど、後に残るは冷たいむくろ』)
[外から唱が聞こえる]
(内唱) 田畑は雑草で荒れ果てた 千里の行軍は誰が為か
虞姬 怎么敌人寨内竟有楚国歌声，这是什么缘故哇？
我想此事定有蹊跷，不免进帐报与大王知道。大王醒来，大王醒来！
(やや) 敵陣から楚国の歌が聞こえるとはどういうことか？
これは何かおかしい。大王さまにお知らせしなくては…
大王さま、起きてください！)
[項羽 切戸口から登場]
项羽 看剑！(何事か！)
虞姬 妾妃在此。(私でございます)
项羽 妃子，何事惊慌？(虞姬か。何を慌てている?)
虞姬 适才正在营外闲步，忽听敌人寨内，竟有楚国歌声。不知是何缘故！
(私が外を見回りしてありましたら、敵陣から楚の歌が聞こえてきたのです。
一体これはどういうことでしょう)
项羽 啊？有这等事！待孤听来。(なんだと！俺も聞いてみよう。)
虞姬 大王请。(ははっ)
[二人は外に出ると、城の外から楚の唱が聞こえる]
汉兵 戦場の壮士 命を軽んず 十年の戦い 何人が帰る
项羽 哇呀呀……妃子！四面尽是楚国歌声，莫非刘邦已得楚不成？
孤大势去矣！
(四面から楚の歌が！ 劉邦めが、楚の国を手に入れたに違いない！
余の命運は尽きた)
虞姬 此时逐鹿中原，群雄并起；偶遭不利，也属常情。
稍捱时日，等候江东救兵到来，那时再与敌人交战，正不知鹿死谁手！
(天下を巡っていくさをすれば 不利になることも常。
一時は引き援軍を率いて再戦すれば 我らの勝利は疑いありませぬ)
项羽 妃子！ 想孤出兵以来，大小七十余战，战无不胜，攻无不取，
未尝败北，今日忽遇见胯夫，将孤困在垓下，粮草俱尽，
又无救兵，恐难闯出重围，八千子弟兵俱已散尽，孤日后有何脸面再见江东
父老……哎呀妃子呀！妃子！据孤看来，今日是你我分别之日了！
(虞姬よ！我は出兵以来、大小70あまりの戦いがあり、そのすべてに勝ち、
負けることを知らなかった。それが今日は、突然に韓信めの十面埋伏の計に
より、垓下に追い詰められ、兵糧も尽き、救援もない。たとえこの包囲を
突破できたとしても、八千あまりの兵たちは散り散りとなり、私は故郷の
老父たちに、どのような顔をして会えるというのか…ああ、虞姬、虞姬や！
どうやら今日が私とお前の惜別の日となるようだ！)
[馬の鳴き声が聞こえる]
项羽 孤的宝马声嘶，待孤看来！
(『烏騷(ウスイ)』の声が…見てこう)
[京劇項羽は橋掛かりから馬鞭を持ってくる]

项羽 烏騷呀！烏騷！（烏騷…烏騷や…）
想你跟随孤家，百战百胜，今日被困垓下，你也无有用武之地了！
(百戦百勝であつたお前も 今、ここ垓下では腕前を発揮できぬな)
(西皮散板) 烏騷马它竟知大势去矣，故而它在帐前叹嘶声息。
(烏騷も時勢が去るのを知り、己が身を顧みて鳴くのであらうな)
[馬鞭を後見に渡す]
虞姬 啊大王、好在垓下之地高冈绝岩不易攻入。
哦、备得有酒再与大王多几杯！
(大王さま、垓下の地は難攻不落の要害です。さあ、杯を重ねましょう)
项羽 哎、如此酒来！（酒をもて！)
虞姬 大王请！（では酒を）
项羽 唉！想俺项羽乎！（ああ、この俺は！)
(吹腔) 力拔山兮气盖世、时不利兮骓不逝；
(力は山を抜き 気は世を蓋う。されど時の利あらず 烏騷も進まぬ)
骓不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何。
(烏騷が進まぬはいかにせん 虞よ 汝のこともいかにせん…)
虞姬 大王慷慨悲歌摧人泪下、待妾妃歌舞一回料已解忧如何？
(涙がこぼれます。私は舞にて、少しでもおなぐさめいたします)
项羽 唉、有劳妃子。(では、頼む)
虞姬 妾妃出丑了。(お目汚しですが)
[虞姬は橋掛りから退場。京劇項羽は切戸口から退場。
能項羽が橋掛りから登場]
能項羽 力は山を抜き 気は世を蓋う。されど時の利あらず 烏騷も進まぬ
烏騷が進まぬはいかにせん 虞よ 汝がこともいかにせん…
[虞姬が剣を持って橋掛かりから登場]
(二六) 劝君王饮酒听虞歌、(お酒を召し上がり 私の歌をお聴きください)
解君忧闷舞婆娑、(私の舞で少しでも 憂いを晴らしてくださいませ)
嬴秦无道把江山破、英雄四路起干戈、
(『秦』の非道が国を乱し 英雄たちが立ち上がった)
自古常言不欺我、成败兴亡一刹那、
(昔の言葉の言うとおり 栄枯盛衰は一瞬のこと)
宽心饮酒宝帐坐。
(ごゆっくり お酒を召し上げ)
[劍舞]
能項羽 おお、大儀、大儀！
[敵が攻め込んでくる音がする]
能項羽 如何に虞姬。汝も共に来たり候へ
虞姬 哎呀大王呀！此番出战妾妃若是同行、岂不连累大王杀敌。也罢！
(大王様！私が共に参っては足手まといとなります。仕方ない！)
愿借大王腰中宝剑自刎君前，也免得牵挂妾妃！
(大王様の宝剣にて自ら首をはね、憂いを断ちます)
(唱) 汉兵已略地，四面楚歌声。君王意气尽，贱妾何聊生！
(漢は既にこの地を攻略し 四面からは楚の歌
君主の気も尽きたならば 妃にも安寧はありません)
虞 将宝剑赏与妾妃吧！(大王様！剣をください)
能項羽 なんぞ！虞姬！
[項羽は剣を渡さない。虞姬は考える]
虞 大王！汉兵他、他…杀来了。(大王様！漢の兵たちが参りました)
[項羽が敵を探しに行くと、虞姬は高樓に走り出す]
地謡 虞氏は思ひに堪へかね給ひて高樓に登りて落つるはさながら
涙の雨の。身を投げ空しくなり給へば
(虞姬は悲しい思いに堪えかねて、高樓に登ると、落ちる姿は涙の雨のように
身を投げて死んでしまったので)
シテ 項羽は虞氏が別れと我が身の。
(項羽は虞姬との別れと、我が身が…)
地謡 なりゆく草葉の露諸共に。消え果てし悲しさ。思ひ出づれば。
劍も矛も皆投げ捨てて。身をたぐばかりに口惜しかりし。
夢物語ぞ。あはれなる。
(草葉の露となり消え果てる悲しさを思い出すと、劍も矛もみな投げ捨てて、
身を焼くばかりに口惜しくなる。この夢物語は実に哀れである。)
シテ あはれ苦しき瞋恚の焰。
(なんとも苦しき瞋恚の炎)
地謡 あはれ苦しき瞋恚の焰の立ちあがりつつ。味方を見れば。
高祖に属して寄せくる波の。荒き聲々聞けば腹立ちいで物見せんと
みづから駆け出で敵を近づけ。取つては投げずて。又は引き伏せ
捻ぢ首とりどりに、恐ろしかりける勢ひなれども。
運尽きぬれば。烏江の野辺の。土中の塵とぞなりにける。
(なんとも苦しき瞋恚の炎から立ち上がり、味方を見渡せば、みな高祖に
味方して波のように押し寄せる。荒々しい声々を聞けば腹立たしくなって、
目に物見せてくれるぞに自ら駆け出して敵を近づける。取つては投げ捨て、
引き伏せては首を捻じ取るなど、恐ろしい勢いを見せたけれども、運が尽き
烏江の野辺で土中の塵となってしまった。)



新潮劇院

一般財団法人 日本京劇振興協会

〒156-0055 東京都世田谷区船橋6丁目7-1 エスカイア千歳船橋103号

TEL : 03-6411-4168 FAX: 03-6411-4196

<https://www.shincyo.com> E-mail : contact@shincyo.com